

和蘭語訳

和

のこころ

曾野綾子

アラブのころ

曾野綾子^{そのあやこ}

発行者 小野田 政
編集者 白井 勝己
印刷 株式会社堀内印刷所
製本 有限会社誠幸堂
発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・千代田区神田錦町三の
一五梅屋ビル(101)
大阪・北区梅田町二七(530)
乱丁・落丁本はおとりかえします

© 曾野綾子 1976 Printed in Japan
〈検印省略〉

0036-076478-2756

目次

乾いた国への誘い水 5

黒と白の人間 48

ベールの美女たち 90

ラクダに関する夢と現実 141

闘う人々の横顔 172

〈本書関係地図〉



アラブのころ

装幀・伊藤憲治

写真・著者
鹿島茂男

乾いた国への誘い水

未知のアラブの国々を私が歴訪することになったきっかけは、六月下旬の或る梅雨の夜、東京の騒音に満ちたおでん屋で実は始まっていたのであった。私はつい先ごろ、クウェートやアラブ首長国連邦から帰って来たばかりという日本人に会った。彼は中肉中背で、眼鏡をかけており、よく気がついて物知りで、その賢さとみごとに体力とで、何回目かの、ビジネスの出張から帰って来たところだった。

「今度は、どこへおでかけで」と私は尋ねた。

「ガルフ沿岸です」

「はあ、ガルフですか」

相手は、私の一言で素早く、私が社会科の知識に全く欠けていることを見抜いたようだった。「ガルフというのはこの場合ペルシャ湾沿岸のことです。ペルシャ湾というのは……」そこで彼は一瞬にやりと笑った。

「紅海と違いますよ。よくごっちゃにする人がいる」

「知ってます、それくらい。名前が違いますから」

全くやり切れない、程度の悪い会話だった。

「西から紅海、アラビア半島、ペルシャ湾の順です。その昔、アレキサンダー大王やその部下たちが、うろちよろしたあたりです」

「アレキサンダーはどこで死んだのですか」

私が尋ねると、彼は、そんなことも知らないのかという表情で教えてくれた。

「かの有名なバビロンです。三十三歳の時でした」

《われらは、バビロンの川のほとりに座り、

シオンを思い出して涙を流した。

われらはその中の柳にわれらの琴をかけた》

旧約の詩篇の、最も甘く優しい個所である。

「実は、今度という今度は、少し体を壊して帰って来ました」

その人は言った。

「どうなさったのですか」

「自律神経の失調症になったんです。心臓が止まったり、脈が百二十くらいに早くなったりしてね。今までこんなことはなかったんですが。何しろホテルの部屋の中は、二十七、八度くらいには冷房で冷やされている。オイル・ダラーのある国ですから。しかし外気温は三十七、八度

で、しかも湿度がものすごいですからね。窓ガラスの外側が、水滴で雨がかかったみたいに見えるくらいです。戸外と室内の温度差と湿度差が違いすぎると、自律神経もおかしくなるらしいですよ」

「暑くて、お辛かったですよね」

「それが少しも辛くないんです。大体、僕は鈍感でしてね。回教圏は一般に酒が飲めないんですけど、酒もないなら平気。毎日、羊肉の料理でも大丈夫。直射日光の下で、気温が五十度になっても何でもない」

「そういうところは、私とそっくりです」

「それなのに、今度ばかりはやられました。年ですな」

しかし、その日、私はまだ、自分がそれらの国にでかけるとは思ってもみなかった。ただ、数時間後に、降りつづける霧雨の中へ出た時、私がある人に傘をさしかけようとするのと、

「すみません。傘はわざと持って来なかったんです。濡れて歩きたい心境なもので……」

と彼は言ったのである。私はその時、彼の言葉の持つニュアンスを理解してはいなかった。しかし今、私にはわかる。彼は乾いていたのだった。砂漠から帰って来たのだから。

アラブ。

私にとってだけではなく、誰にとっても、遠い遠い、現実感の極めて薄い国々。西はモリタニア、モロッコから、東はイラクまで、二十の国々だと聞かされても、少しもぴんと来ない。モロッコ？ ああ、デートトリックヒが靴ぬいで砂漠の中を男を追いかけたところね。アラブ首長国連

邦って、その人、別に首が長いわけじゃないんでしょ。オベック？ 知らない。だって入社試験受けるわけじゃないもん。石油の値段？ ああ、それなら、うちの傍の石油屋ひどのよ。おとしは一リットル二十一円だったのに、去年は三十三円で売りつけたんだから。

そこでやっとアラブは、日本人の意識に結びつく。しかしこれもアラブが結びついたのではない。アブラ（油）が結びついただけである。

私は八月末、四週間の、アラブ諸国への旅に出発した。そして、行く先々で、アラブとはどのような人々か、を聞きつづけた。語ってくれた多くの人は、日本人であったが、中には外国人もいた。女のおしゃべりの最長記録とも言うべき「千夜一夜物語」ではないが、私には今、新たな現代のアラブについての物語を、少しも修正を加えずに、伝える義務があるだろう。私は、同一対象について或る人の発言と、別の人の印象とが、全く矛盾しようと、一向にかまわない。一人一人の受けとめたアラブこそ、その人にとっての真実なのだから。そして、物語は、精神が自由に解き放たれた状態で語られるべきだという原則を貫くために、私は敢えて、誰がこのことを言ったか、明らかにしないつもりである。ただアラブの心を語ってくれたすべての人の中に、日本人にアラブを知ってもらいたい、という少年のような情熱があった。私はそれにこたえたいと思う。

さて、旅は始まる。同行者は、私の幼稚園からの女友だちで《木霊》^{こだま}と呼ばれる人物である。彼女は何のめぐり合わせか、私が動乱の地に行く時に、必ず同行するハメになっていた。アジェンデ政権がクーデターで倒れて一カ月目のチリに入った時も、このうてば響くような精神と、冷静で視力のいい眼と、みごとな健康を持った《木霊》が一緒だった。なお人名は明かさないが、

参考書名は、最後に一括してご報告するつもりである。

「ところで、アラブ人、というのは、いったい誰のことなんですか？」

それも知らずに、日本を出て来たんですか？　と言われることを、恐れもせず、私は目の前にいる日本人に尋ねた。場所は私の第一の訪問国リビアの首府の一つトリポリの海岸に面したビーチ・ホテルの、あまり冷房のきいていないロビーであった。

数日後の九月一日に、この国は満六歳の誕生日を迎える。だからこのホテルも諸外国からの客で一ぱいだった。高級将校、裾の長い服を着て頭の布を丸いワッパでおさえたどこかのアラブの国からの紳士、玄関前の警察の車。町中ではもうパレードの用意ができていた。急ごしらえの栈敷にはアラブ風に絨毯が敷き詰められ、そこに中華人民共和国から輸入されたばかりのびかぴかのスチール製の折りたたみ式の椅子が運びこまれていた。

しかし、私がこのような原始的な質問をした背後には、私なりの焦りがあったのである。なぜなら、私はリビアへ着くなり、リビア人気質を求めて、現地の日本人にいろいろと聞いて廻っているのだが、一向にリビア人というものが捕らえないのである。

「うちの会社は、エジプトの会社ですからね。使っているのは、九五パーセントまでエジプト人です。リビア人はそうですね、日本風に言うとお掃除のおじさんと、お茶汲みのお嬢ちゃんくらいかな？」

私は、この国へ着いて以来、どこへ行ってもバカのように同じ質問をくり返した。

「あの人はどこの国の人ですか？」

「リビア人です」という答えの返って来ることは珍しかった。

「あれはチュニジア人です」

「この人はヨルダン人でしてね。彼女はパレスチナです」

その国へ行きながら、その国人がなかなか見当たらない、ということとは、日本人には全く想像しにくいことである。日本はどこへ行っても日本人だらけだ。私など近眼のせいもあって、たとえ韓国や台湾の人がいても、みんな日本人に見えてしまう。ところが、こんなにリビア人がいない癖にこの土地に住む人は、顔を見ただけで、かなり正確に、スーダン人か、エジプト人か、シリア人かを判別する。

リビアでまちがいにリビア人に会いたかったら、タクシートの運転手と接触することである。タクシーだけはリビア人の独占的な仕事になっている。もともとこのことを知ったのは、帰る間際になってからであった。

なぜリビア人がいないか。答えは簡単だ。人口が僅か二百万人ちょっとしかないのである。それに比べて、スーダン人は千七百万人もいるし、エジプト人に至っては、三千五百万人もいる。しかも、リビアでは法律で、リビア人の給与の最低が六十L・D（リビア・ディナール）と決められている。これは約六万円である。それに対してエジプト人の給与ははるかに安く、しかも能力がある。アラブ全域にわたってアラブ人は、いやしばしば、インド、パキスタン人まで含めて人間は、労働の需要に従って、アラブ諸国全域を流動している、ように素人目には見えるのである。

る。それならば、ナセルが言ったように、「アラブは一つ」なのか。一つとすれば、いかなる特徴をもってその決め手とするのか。

「それは、きわめて、むずかしい質問ですね。ルートヴィヒ・ケーラーというスイスの旧約学者が、そういう点について『ヘブライ的人間』という本の中で、いろいろおもしろい説明をしてくれてますがね。つまり《歴史に出て来る民族集団はすべて雑種である》としか言いようがないんじゃないですか」

しかし私はそう説明されても引かなかった。

「ラファエル・パタイという人の本によりますとね。回教が七世紀に確立する以前のアラブ人というのは、アラビア半島とシリアの砂漠に、ラクダを飼って住んでいた人たちだと言うんです。

これは紀元前九世紀のアッシリアの記録にあるらしいですが、そのころからラクダは家畜だったようですわね」

「ムハンマドが出てからの、アラブはどうなりましたの？」

「一般的にイスラムに入信して……おもしろいですよ。イスラムは改宗と言っちゃいけないんだ。たとえ他の宗教から移って来ても、入信と言わなきゃいけないんだそうですけど……昔から使っていた祖先伝来の言葉をアラビア語に変えた人たち、この人たちをアラブ人と言うんですね。もっとも、エジプトなんかじゃアラビア語が定着するのに二百年かかってますけど。それと同時にアラブ人たちは、あちこちに領土を拡げた。彼らはそこで、初めて町の人になって定住もしたんだけど、そこで文化的にもまじり合って……」

「言葉はすごいことになったでしょうね」

「そうそう、同じアラブでも、東北弁、関西弁……どれがオリジナルかなってこと、わかったもんじゃない。しかしとにかく、アラビア語を喋る人間はアラブ人と言うことはできる」

「アラブ人は確実にアラビア語を喋りますか？」

相手はにやりと笑った。

「僕の知ってる範囲ですけどね、そうでもないんだな。たとえばサハラの中にいる人たちでトアレグ語を喋ってるのがいる。ヌビア人もヌビア語ですしね。しかし一般論に戻ると、こういうことになります。

アラビア語を喋り、アラブ文化圏に育ち、アラブのいずれかの国で生活し、ムハンマドの教えを信じ、アラブの民族のどれかに属すること。このうちの一つ以上の条件をみたす者が、アラブなんだという説が出されていますが、ここらあたりが妥当でしょうかね。

しかし母国語がアラビア語であるべき子供が外国で生まれ育っても、やはりアラブ。イスラム教でなくて、キリスト教のアラブもたくさんいる。コミュニストのアラブもいる。しかしまぎれもないアラブ社会の中にいるように見えても、エジプトのコプト派のキリスト教徒と、それからユダヤ人たちは、自分たちをアラブとは思っていない、とバタイは書いておりますな」

「少しめんどくさくなって来ました」

私は正直に言った。

相手は慰めてくれた。

「大切なのは、はっきりわかった、ということじゃなくて、はっきりわからない、ということを知るからなんです。何しろ、一億三千万人が、広大な地域に拡がっているんですからね」アラブという語が初めて文献に出て来たのは、紀元前八五三年のアッシリア碑文である。

リビアで、私は一冊の案内書を買った。そこには一九六九年九月一日に、革命評議会が出した、最初のステートメントというものが記されていた。短いものだが、冒頭の部分と、真ん中の、私達には思いつかない個性的な文章のところだけを訳出する。

「最も偉大にして、最もあわれみ深きアッラーの御名において、全能の神の認めたもうた革命委員会の第一宣言を信ずる人々を助けることこそ、我々の責務である。（中略）おお、遊牧民（ベドウィン）の子らよ、おお、砂漠の息子たちよ、おお、古き町々の子孫よ、おお、無垢なる田舎の若者たちよ、おお、我が愛すべき美しい村々の子供たちよ……（後略）」

私は、アラブの国々を、心ならずも上空から見た。あまり広い地域なので、地上を旅することは現実問題として、なかなかできにくいのである。

砂漠の上空は、雲一つなく晴れ上がっているというのは嘘であった。我々はしばしば、濃い雲の中を飛んだ。そして、雲が切れた時に見下ろすと、下は、白々とした、黄色い、時には、微かに赤味を帯びた砂漠であった。よくもまあ、これほどに水のない土地がつづくのだらう、と思うほどの砂漠であった。

エジプトにいた時、エジプトの国家がどんな形をしているか、つまり隣国との境界線はどんなふうになっているか、というようなことは問題でない、という説明を受けたことがある。

「つまりエジプトというのは一本の線なんです。ナイルに沿って緑が一本の糸のようにつながっている。それだけがエジプトなんです。ほかの土地はいくらあっても、不毛の土地だから、使いものにならないんですよ」

たとえ国家の全面積の八割が山地であろうと、そこに植林をして緑化できる日本とは、全く何もかも違う国家なのであった。そして私は、又、別のところで、全く違う人が言った言葉を思い出している。

「どうしてエジプト人は、アラブ諸国へでかせぎに行つて、あまり給与もよくなくて、それで不平不満を起こさないんですか？」

私は一人のエジプト通の日本人に質問したことがあった。するとその瞬間、彼の顔には、このような大きな問題を一言で答えさせられるのは迷惑だ、というような表情がはっきりと現れたが……ということは《答えをそらすぞ》という意思表示にもなっていたのだが……彼は、私を納得させようとしてこう答えたのである。

「さあ、大してそういうことにはあまり問題を感じてないんじゃないですか。エジプトには、ナイルがあるからいいんですよ。いつの日か、ナイルのほとりに戻ってくれば、それでいい、と思つてるんですよ」

これはあくまで、表面的に受けとってはいけない言葉である。しかしナイルに対する思いだけ